

水産試験場研究評価委員会 評価のとりまとめと機関の対応方針

(中間評価)

事業名 (課題名)	資源管理漁業推進事業 (資源管理体制推進事業)				研究 期間	平成 23 年度～ (12 カ年)	予算 区分	委託
研究の取扱基準 A. 計画を超えて順調 (このまま研究を継続) B. ほぼ計画通り (このまま研究を継続) C. 研究方法を修正する必要あり D. 研究を中止する必要あり								
委員名	1	2	3	4	5	6		まとめ
評価結果	B	B	B	B	B	A		B
主な意見								
<p>①研究目標</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 漁場環境や社会環境が大きく変化する中で経営分析等を含めた目標設定は妥当である。 ・ 資源管理により、持続的利用が図られ、漁業経営が維持され、社会からも求められている課題である。 ・ 重要な成果が期待できるので、混獲の問題の現状と課題を整理した上で、研究目標をさらに具体化することが望ましい。 ・ 漁獲対象種に適した漁業技術の開発や合理的な資源管理技術の開発が求められている。 ・ 資源量維持、漁業経営の安定化を目標に、技術面の漁具改良と経済合理性を追求した水揚げ手法を研究することは妥当である。 <p>②研究手法の妥当性</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 漁具改良等の技術開発以外に経済分析も加わっている。 ・ 漁具改良による漁獲物の変化、省エネ効果、価格調査等複合的な分析が行われている。 ・ 研究成果を漁業の現場で生かす方法についても、何れかの部署なりで、早めに検討を開始しておく必要がある。 ・ 従来漁具改良試験に加え、経済面からの視点でも調査・分析が行われている。 ・ 資源量維持、漁業経営の安定化を目標に、ハードとソフトの両面から研究を行っている。 <p>③計画の進捗状況</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 自己評価どおり計画的に進捗している。 ・ 予定通りデータの集積が進んでいる。 ・ 網目サイズの改善に伴う漁獲物の変化についても極めて有益なデータが得られており、計画は順調に進捗している。 ・ 計画通り漁業技術の開発が進んでいる。 ・ 計画の通り、漁具改良試験、漁業経営に関するデータの収集及び解析が進められている。 <p>④研究の成果と発信</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 成果報告会や論文発表など成果の発信に務めている。 ・ 漁業者団体へ得られた成果を適宜説明するなど発信を行っている。 ・ 研究の成果は、当該分野の研究者のみならず、漁業の関係者や関係組織などへも発信してゆくことが大切である。 ・ 成果は漁業者検討会等で報告され、また論文として公表もされている。 ・ 資源管理協議会へ調査結果の報告が行われている。漁具改良試験の成果及び魚価変動の解析結果が公表されている。 <p>⑤今後の計画の妥当性</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 調査体制も整っており、概ね妥当である。 ・ 変動する資源や社会経済面をとらえて分析を加えていく必要がある。 ・ 研究目標のさらなる具体化に並行して、これに研究計画を対応させることが必要である。 ・ 経済分析を進める計画となっており、新たな資源管理の提案が期待できる。 ・ 操業や漁業経営に影響を与える海域環境及び社会情勢の変化への対応が求められている。 								

⑥総合評価（研究の取扱）

- ・ 漁場環境や社会状況の変化により漁船漁業を取り巻く環境は大きく変化している。これらの環境変化を見落とすことなく水産資源管理の高度化に努めてほしい。
- ・ 内湾の底魚資源は非常に厳しく資源管理は重要であると思う。魚価は需給バランスにより大きく変動するので、適切な資源管理と水揚量を解析され、漁業経営に寄与されることを期待する。
- ・ 漁業経営を取り巻く環境要因を細かく分析し、漁業経営への効果が大きい提案を行っていくことになるが、実現には漁業者や流通関係者等の理解を十分に得る必要があるののでしっかりとした根拠付けを期待する。
- ・ 本研究では、極めて重要な研究成果が得られつつあり、その研究成果は、将来の新たな資源管理、生態系管理に繋がるのが期待できる。この混獲防止技術の開発により混獲されずにすみ生物群が、資源と生態系に及ぼす効果についても、評価あるいは考察を進めていただきたい。全体的には、この技術開発により、現状の問題点のどの部分がどの程度解決されるのかを把握しながら今後の研究を進めると良いのではないか。
- ・ 漁業の経営環境が大きく変化中、漁業者が多種多様で変動の大きい水産資源を有効かつ持続的に利用できるよう、経済面も考慮したさらなる資源管理技術の開発を期待している。
- ・ 魚類資源を有効に活用するための調査研究が行われている。漁獲サイズを大きくして、小型魚を残すことにより、長期間において安定した操業が可能となり、しかも最終的には水揚げ金額が増加することを提案できたことは、資源管理型漁業への貢献度が大きい。引き続き、海域環境や社会情勢の変化に対応できる柔軟な漁業経営を目指すための試験研究を行っていただきたい。

機関としての対応方針

資源を管理する技術として、操業を中心とした問題点の抽出と改良を進めてきた。成果については、漁業者への普及を進めており、一定の成果があったと考えている。今回、委員から御指摘のあった、漁具改良による有用種小型個体の混獲防止については、重要な視点であり、改めて評価していきたい。

今後は、経済面の評価にも着目して、愛知県の漁業の強みや特性を生かすことができるように、水揚げ方法や流通方法の検討など、漁業経営を改善するための研究を進めていきたい。